

名句が滑稽句に変身第二弾 ①

小林英昭

令和二年五月号～七月号で、第一弾を書かせていただきました。今回は、第二弾です。パロディあり駄洒落あり、あの手この手で名句と格闘してみました。名句を変身させることで滑稽句をつくるヒントが見えてくるかもしれません。

名句 雁よりも高きところを空といふ 今瀬剛一

秋雲よりも高きところを空といふ

当たり前のことを当たり前にとってみる。これは簡単そうで、なかなかできません。名句の発想を越えて変身させられませんでした。

名句 鶴の来るために大空あけて待つ 後藤比奈夫

鶴を待つ機織り部屋をあけて待つ

ご存じ鶴の恩返しです。障子の穴からこっそり覗くのはやめましょう。鶴に逃げられてしまいます。これも、名句のスケールの大きさにはかないません。

名句 うしろより初雪降り夜の街 前田普羅

うしろより声かかりけり春の夜

微醺を帯びて二三人で夜の街をぶらぶらしていると、「お兄さんイイコいませ」と声がかかります。鼻の下を長くしていると、すっからかんとなりますよ。

名句 海に出て木枯帰るところなし 山口誓子

木枯は片道切符しか持たぬ

片道切符しか持たなかった木枯は、とうとう帰ってこられませんでしたとさ。

「海を出る木枯の手には片道切符」とも。

名句 流れ行く大根の葉の早さかな 高浜虚子

足湯する白き大根の太さかな

温泉場で女性のグループが足湯を使いながらおしゃべりに余念がありません。ずらり並んだおみ足は色白で、うまそうなほどまるまるとしています。

名句 春の灯や女は持たぬのどぼとけ 日野草城

地芝居や女形の首にのどぼとけ

地芝居の女形の見事な喉仏。激しく首の中を上下します。よよと泣く時は、袖でしっかり隠さねばなりません。

名句 兵たりし父外套を残しけり 榎本好宏

兵たりし父石ころを残しけり

いつどこで死んだのかもわからない。遺骨も遺品も無くて、代わりに戦地の石を白木の箱に入れて渡されたということもあったそうです。悲劇は繰り返してはなりません。反戦の句です。

名句 終戦日何処へゆくとも父言はず 北澤瑞史

敗戦を終戦日とふ負けをしみ

敗戦なんだから素直にそう言うべきでしょう。人間のずるさを指摘してみました。

名句 新涼や白きてのひらあしのうら 川端茅舎

ステテコや黒きすね毛や足の裏

新涼は秋の季語ですが、残暑がきついので、ステテコ一枚で、テレビでナイターを見ている様子です。

名句 ねんねこの中で歌ふを母のみ知る 千原叡子

ねんねこの中のお漏らし母のみ知る

お母さんの背が温かくなる。あらあらお漏らしをしたのね。今は、ねんねこも布おむつも使わないので現代の若いお母さんには理解されないですね。